

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 李勝鉉

李勝鉉氏の「柳宗悦の宗教史思想の研究——信と民と美をめぐる」は、柳宗悦(1889-1961)の生涯にわたる思想の展開を、「不二」思想という観点から総合的に理解しようとした業績である。李氏は柳の思想の展開を3つの時期に分けて考察する。西洋思想を学びつつ『白樺』の同人として、また著述家として思想・宗教論執筆に取り組んだ第1期(明治末から大正中期)、朝鮮の陶磁器の価値に目ざめ、次いで日本独自の宗教性を帯びた美のあり方を見出し、さらに民芸運動に取り組んでいく第2期(大正中期から昭和初期)、一遍や妙好人の信仰にひかれ民衆の信仰の中に、対立する二元を超越しつつ平和を目指す無対辞文化を構想するに至る第3期(昭和10年代から最晩年まで)である。

第1期においては、柳は「不二」思想は新たな科学に期待を寄せつつ、大いなる生命への融合を説く生命論から始まり、ウィリアム・ブレイクに出会うことによって想像力による超越の思想を学び、さらに「無」の概念で東西の宗教を総合的に捉えようとするに至る。「不二」の概念が用いられるようになるのは1917年だが、李氏はその前後を通して、二元の対立を超克する論理への関心が一貫していたと論ずる。第2期においては、具体的に超越を形に表す美への関心が前面に出る。植民地支配を批判し、日本と朝鮮の差異を重視して朝鮮文化の独自性に深い敬意を払うに至るが、それは美を尊ぶとともに組織的抑圧をきらうアナキズム的な発想に支えられてもいた。朝鮮文化の独自性を見出した柳は続いて日本の独自の美の探求に向かい、木喰仏、さらには「民芸」にそれを見出していく。この時期は「不二」思想は言説的な表現をとることが少なかったが、李氏は、東洋の美の探究を通して柳の「不二」思想がより堅固な基礎付けを得たと捉える。第3期には、民芸に見られた美を凡夫成仏の思想と関連づけて民衆的な「不二」の信仰の現れと捉え、「美の浄土」「無対辞」などの概念によって異質な二元を否定することなくそれを超克する境地を示すに至ったとする。「不二」思想を民衆の日常生活に即したものとして理解し、その平和思想としての含意をも引き出そうとしたところに「不二」思想の深まりが見られる。

柳宗悦の生涯にわたる著述や文化活動の全体を丁寧に読み込み、その展開を「不二」思想という観点から総合的に捉えようとした試みは独自である。また、日本はもちろん韓国での柳研究の成果をもよく踏まえ、随所に新しい知見が示されている。論理の展開に今ひとつ明快さを欠くところはあるが、柳の思想の複雑な展開を総合的に捉えようとした功績はそれを補ってあまりある。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。